

「二世」から見る、戦前における台湾文学

周金波、川合三良を中心に

SHU KIN HA AND KAWAI SABURO

A second-generation view of pre-war Taiwanese literature

唐 瓊 瑜*

I would like to try and move away from previous modes of research, which have concentrated almost exclusively on the confrontations between colonial rulers and the peoples they rule. My aim in this presentation is to examine the troubles between *naichijin* (Japanese residents of Taiwan) and *hontojin* (Taiwanese), who had lived uneasily side by side for 50 years, from the common-ground viewpoint of the “second generation”. I shall compare the works of Shu Kin Ha, who is often referred to disparagingly as an Imperial Writer (*komin bungakusha*), with those by the little known Kawai Saburo, and consider the psychology of some of the young men who lived in Taiwan during that period.

The meaning of *nisei* (second-generation Japanese residents in Taiwan) was extended to include Taiwanese born after the Japanese occupation for the following reasons:

* TANG Chiung-Yu 台湾私立淡江大学日本語日本文学学科卒。97年3月に武蔵大学大学院修士課程を終えて、現在、同大学院博士課程一年に在学。修士論文：「日本の台湾統治期における二世文学研究——周金波、川合三良を中心に——」

The word *nisei* originally had a connotation of “immigrant”. Hence the confrontation arising from the contrast between the society in which a *nisei* was living at present and the distant society where his parents had been born. *Nisei* were compelled to seek out an identity for themselves. But this new individuality led in turn to new contradictions and new anxieties. I believe we can discern this pattern in the works of these two writers. A series of Shu Kin Ha’s works paralleled contemporary social upheavals (compulsory military service; civil pressure to implement name revision; adoption of Shintoism; linguistic and educational reforms and so on). Shu Kin Ha called for the old customs of Chinese culture to be discarded, embraced the new national policies, and asserted his intention to be “a fully-fledged Japanese.” At the same time, the sense of loneliness he feels upon finding himself regarded as a dangerous outsider shows the desperation of his attempt as a *nisei* to become a genuine member of the Japanese Empire.

By contrast, Kawai Saburo addresses the problems of discrimination, reconciliation between Japan and Taiwan, and military service. His description of the gap between Japanese in Japan and Japanese residents of Taiwan is particularly interesting, since this gap is inseparable from the incentive for the Japanese move into Taiwan.

始めに

本日、この発表の機会を与えて下さったことを本当に心から感謝します。この研究テーマは、今まで、殆ど研究されておらず、従って、不備な点がたくさんあると思いますが、何かの助言がいただければ、と思います。

この発表で論じる周金波と川合三良は、この両者については、お手元にある資料の1と2（末尾参照）を参考して下さい。この両者は、日本文学史上にしろ、台湾文学史上にしろ、無名と言っても過言ではない人物です。台湾文学

に対する一般的定義、資料の3（末尾参照）のような定義から言えば、川合氏の作品は台湾文学の一部分にさえ属さないことになります。おそらく、同じ理由から、周金波もしくはほかの植民時期における非大和民族出身者は日本文学史上に登場することはまずありません。この事実は、「血筋」の重要性を物語っていますが、台湾の複雑な歴史事情から考えて、ここでは、こうした暗黙の定義に反して、あえて、台湾文学というのは、台湾生活経験者によって、書かれた作品のすべてである、と定義します。即ち、作品発表の言語を問わずに、台湾生活経験者により、ある時期においての台湾に関する人、事物が対象に描かれた作品を、台湾文学範囲の視野に入れるようにします。そうすることによって、日本統治時代の台湾文学を論じるとき、「日本人作品」の姿が全く見えないという不思議な窮地を避けられるだけではなく、その当時の文学活動についての「事実」にも一歩近づけると思います。

それに、「血筋」の壁を越えて、「民族的感情」の要素が薄くなっていけば、作品は、社会環境の影響を受けているとは言え、作者一個人の思想、生き方が絡んだ結果であり、必ずしも主流の文学表現である必要はない、と主張するのも可能になります。言い換えれば、既成概念から解放することが可能となるのです。私はこの考え方に基づいて、50年間も混住してきた在日日本人と台湾人には果たして対抗関係しかなく、共通感情や苦悩はないのか、を探求したいと思います。

こういう意味から「二世」である台湾人、周金波と在日日本人、川合三良を選び、対照させながら考えたいと思います。一般的には「二世」といえば、在日日本人二世をさしますが、ここでは、あえて、占領された後、生まれて来た台湾人も含めて、「二世」を使うことにしました。なぜなら、「二世」という言葉は、初代が何らかの理由で、自分の故郷から離れて他の場所へ移動し、そこに住み着くことになって、その場所で初代から生まれた人物をさすからです。要するに、「二世」の登場には、根本的に「移動」という要素が含まれているのです。日本内地から「台湾」という新天地に移り住んで、そして、新天地に

入り込もうとする在日日本人二世と、「日本帝国」という新しい国に入り込もうとする台湾人二世とは、共に、台湾を支えており、「二世」たちが「移民」社会における二世特有の性格をもっているのではないかと考えられるからです。

一、周金波と川合三良

周金波と言えば、「皇民文学」を抜きには語れません。第17代台湾総督小林躋造（1936・9・2～1940・11・27）が「皇民化、工業化、南進基地化」という方針を決めた後、皇民化運動の風潮が吹き始め、その最中、「皇民文学」と呼ばれる作品が現れました。「皇民文学」に対する代表的論述、資料の4（末尾参照）を見て下さい。この論述を見れば、「皇民文学」というのは何を指すのが、より明確になります。

この資料4の（A）論に見られるように、皇民文学と言われる作品に対して、同情したり、弁明をしつつも、結局資料4の（B）論に見られるように、「皇民文学」の全面否定にたどり着く、というのは、「皇民文学」に対する評価です。「皇民文学」を否定的にみる傾向が強いため、その結果、「皇民文学者」という悪名が敬遠されて、作品に対する極端な解釈もされるようになります。このときのキーワードは、作品の中に反日的要素が読みとれるか否か（日本に媚びへつらうか）、さらにその作品について作者自身がどう証言するのか、にあります。この例は、資料の5（末尾参照）を見て下さい。こういった民族感情的の見解の下で、「皇民文学」に対する評価が定着していきました。その結果、これらの分野は暗黙のうちに、触れてはならない領域となりました。周金波の作品はまさにその一部分なのです。戦後になって周氏がまったく小説を書かなくなった事もあって、戦前文学に関する研究書、論文では、周氏に関する言及はなされなかったか、もしくは単に、「正真正銘の皇民化文学である」という一言で片付けられたかのいずれかでした。確かに、民族主義者の目からみれば、周氏が親日派の一人であることは否定できないかもしれませんが、その「当時」の周氏の成長過程から考えれば、彼が「台湾人でありながら、日本人である」

というのは極めて自然なことです。ですから、周氏が意識の上で日本人になりきり、親日派となったからといって、彼の作品がすべて認められないという理由にはならないと、私は考えています。なぜなら、周氏は「日本人」創作者なのですから。私は一人の「日本人」創作者——周金波の作品を通して、当時、一部の台湾青年にあった内面の葛藤を考えて行きたいと思います。

川合氏については、詳しいことはよく分かりません。当時の川合氏に関する記事から推測すれば、年齢は周氏より上ですが、作品の発表はほぼ同時期で、しかも周氏と共に第一回文藝臺灣賞受賞者でした。周氏にしても川合氏にしても作品の中には、台湾に生まれたからこそ生じた特有の苦悩と葛藤——台湾出身の青年が正真正銘の日本人になるため、如何に努力しなければならなかったか、同じ日本人なのに台湾に生まれただけで、なぜひどい目に遭わなければならなかったのか、が現れています。

二、二人の共通的特質

周金波と川合三良、一見すると、対立する立場、一方は被植民者であり、もう一方は植民者であるはずなのに、それぞれの立場を超えた、同じ人間として、この二人には、ある共通的特質があると思われます。それは少なくとも二つあると言えるでしょう。一つは台湾社会に対する意識です。

I 台湾社会に対する意識

「第二世」は在台内地人の二代目を指す言葉ですが、実は周金波も二世です——彼は日本が台湾を統治した後の二代目本島人です。私は二人の二代目の、対照的な部分に興味を持ちました。本籍は台湾となっていました。実は生活の基盤は内地にあったと言ってもよいほど、周氏は内地生活経験が長かったです。これに対して、川合氏は本籍が内地にあったものの、内地就学の何年間かを除けば、おそらく生活の基盤はやはり台湾にあったはず。そのため、周氏にとって郷愁として喚起されたのは内地であり、逆に、川合氏の場合は、台湾になるのでしょうか。もちろん、二人とも台湾に対する愛着があることに変

わりはありませんが、ただ、「台湾」に対する接触方式が違うと考えられます。というのは周氏は台湾を愛しているからこそ、「ビシビシやる」という方法（その内容については、資料の6（末尾参照）を見て下さい）を取ったのに対して、川合氏は台湾現状への理解を示しました。それは、台湾人に関する描写を見れば、明らかです。

周氏の作品『水癌』、この作品については資料1のAを見て下さい。『水癌』の中では、無知且つ野卑である母親が台湾の落後の象徴とされています。そして、やはり周氏の作品である『ものさしの誕生』、この作品については資料1のCを見て下さい。この『ものさしの誕生』の中でも、主人公の呉文雄が小学校の学童に対する憧れと劣等感を無視できない様子が書かれています。要するに、周氏の作品の中では、常に、台湾人が劣っており、内地人が優れているというように、両者を対比させています。そこから、周氏の作品の中に、切実な近代化、日本人としての自覚と国家政策に対する協力が訴えられています。これに対して、川合氏が書いている台湾の人々は、小説『一つの縮図』の主人公、黄清合のように冷静に現実を凝視した上、自分の歩みたい道へ進んでいくエリートもいれば、小説『出生』にでてくるような土地ブローカーもいる。この二つの作品については、後程、参考資料2のCとDを見て下さい。いずれにしても、共通するのは、登場人物に対する作者の寛容な表現です。たとえば、小説『襤褸』、この作品については資料2のEを見て下さい。この小説の中にでてくる女中の呉氏葉妹にいろいろ欠点があっても、「どことなく愛嬌があり、にくめない」と、飾り気がない、少し田舎くさい人物像として描かれています。この女中が、奥様の下駄まで盗んだことを聞かされた場面で、

「……内地人の女の持つてゐるものが身につけて見たかつたんぢやないかな。内地式の服装がして見たかつたんぢやないかな」

「……盗んでもどうしようと云うやうな意識的なあれはないんだ、と思ふな。甘い考へ方かも知れないが。」

と言う表現に見られるように、かなり寛容な態度と理解を示しています。けれ

ども、周氏が作品の中で内地への憧れを描くのに反して、川合氏はむしろ内地人又は在台内地人を嘲っています。彼の小説の『或る時期』、この作品については資料2のBを見て下さい。この『或る時期』の中で、洋一の従妹の妙子については、こう描かれています。

「……臺灣特有の東京語を使用し、内地殊に東京といふ言葉に漠然とした憧れを持つてゐた。そして、人種的卑見に基くらしいある種の気位の高さを保持してゐた、附加へれば、臺灣の中流以上の家庭の娘によく見かけられる、ごく平凡なタイプの一例であつた。」

一方、周氏のほうは、『水滸』で、次のような文を書いています。

「……一見乞無教養な奢つた女であることが知れた。斯ういふ種類の女は格別に珍しくはない。といふのは此の地の庶民階級の各家庭を通じて、一人や二人は必ず居るからだつた。」

この両者の書き方を対比すると、大変面白いものがあります。川合氏は台湾人に対する態度が寛容であり、それに対して周氏は厳しい批判をしています。逆に、内地人に対する態度は川合氏は批判的であり、周氏は憧れをもっています。

ここから分かるように、二人は自分の身近な存在を厳しい目で凝視しています。その出発点は、自分自身に対する反省にあると思われます。さらに、付け加えれば、二人ともこれから飛び込もうとしている社会に対して、その社会の長所ばかり見つけようとしていたのではないのでしょうか。と言うのは、川合氏の場合は、二世として台湾に根を下ろす希望があるからこそ、「内臺融和」を主張します。その目標のために、進歩して行く途中の台湾人民を、自然に、広い心で見ってしまうのです。一方、周氏は台湾文化の向上のため、日本化すべきだと一貫して主張が変わらず、「日本」が周氏にとって絶対的存在です。このような二人の、政治上の態度が一致するのは、実は当然のことです。要するに、川合氏にとっての「内臺融和」は、決して内地人を「台湾人化」するのではなく、台湾人を「皇民化」、即ち日本人にさせることによって、「本島人」と

の間の、見えない「壁」を超えることが可能になると言う考えです。そして、「皇民運動」というのも「内臺融和」の一環に過ぎません。こういう意味から考えると、川合氏にとって、「内臺融和」は、戦時中だからやるべきことというだけではなく、台湾社会に馴染もうとしている「第二世」が目すべき課題であります。

そこで、注目すべきなのは、周金波、川合三良この二人の二世の現状に対する妥協、或いは馴染みと言ったほうがいいかもしれません。つまり、前の世代との違いです。前の世代が旧習などに、たとえとらわれていても、おそらく、二世はそのような感情にじゃまされることなく、前向に、時勢に乗っていくつもりでしょう。要するに、二世が、自分たちの理想、或いは利益になりそうな現実面をしっかり握っているのです。ですから、川合氏が「内臺融和」を主張し、周氏は「日本人」との違和感をなくすという、二人とも、積極的に新しい台湾の建設を望んでいたわけです。

ただし、二人が国策に賛成し、協力する姿勢が一致すると考えても、二人の間の異質的部分はゆるぎません。それは、「出身」です。もともと日本人の川合氏が、大和民族の一員として、強い勢いの政府側、即ち植民者側に従うのは、何の矛盾もなく、至極自然なことです。けれども、それに対して、周氏が異民族の政府側、即ち植民者側に馴染もうとすれば、周囲からの不信、或いは敵視されざるをえません。これは、「優」に立つ人間と「劣」に立つ人間との根本的な違いでしょう。

二人のもう一つの共通点は故郷に対する疎外感です。

II 故郷に対する疎外感

もし、故郷というものを、本籍と定義するならば、川合氏にとって、「内地」こそが彼の故郷になるはずですが。そして、言うまでもなく、周氏の故郷は台湾です。けれども、人間にとって、故郷という概念は、はたして、そんなに明確に定義できるものでしょうか。それは、法律上の定義より、むしろ「情」という働きが人間に動揺を起こさせ、苦悩の種になるのではないのでしょうか。

川合氏が勿論所謂「日本人」であることは言うまでもありませんが、ただ、故郷と呼ばれるべき「内地」という、慣れない環境、土地には、たとえ「郷愁」が喚起されるようなものがあるとしても、おそらく前の世代から聞かされた話によって、美化された幻のようなものでしょう。実際、「内地」へ行って見た後、想像していた「内地」と、目に映った「内地」との落差（この落差については資料7（末尾参照）から伺えます）、この落差が逆に台湾のことを思い起こさせ、自然に「郷愁」のような情緒を喚起して、台湾に「帰郷」しようというような気持ちに陥っています。即ち、台湾こそ、川合氏にとって、心の故郷なのです。

逆に言えば、周氏の心の故郷は「内地」の東京でしょう。しかし、「内地」にいた時、故郷というのは恐らく依然として本籍にあたる「台湾」であったに違いありません。ですから、『文藝臺灣』という雑誌の創刊号を見たとき、
「台湾への強い郷愁」（これについては資料8（末尾参照）を見て下さい）が湧いて来る訳です。遠い故郷からの一冊の雑誌を通して、周氏の心の中に潜んでいた台湾への感情が呼び戻されたのです。この感情の中に、故里の建設を自らの務めとする一青年の高い理想が含まれていました。けれども、実際、台湾に戻って見たら、小説『郷愁』（この作品については資料1のFを見て下さい）の中で母が言った言葉——「社会を知らない一本調子な、恨みを買ふことばかり一生懸命になつてゐる」——のように、故里の人々の心を掴む事ができずに、台湾の現状に入り込めません。次の歌から当時の周氏の心境が伺えます。

「内台婚、提唱する劇、日本人と中国人の両者に受けず」（この歌の出処は、資料9（末尾参照）を見て下さい。）

川合氏でも周氏でも「故郷」と「心の故郷」とが一致しない限り、苦悩と挫折感に付き合わなければなりません。それは川合氏と周氏の二世としての共通な運命かもしれない。と思います。

資料1 周金波について

1920年生まれ。生まれてから間もなく日本に連れてこられた。23年に関東大震災のため、帰台した。34年に再び日本へ、そして、日本大学付属中学に入学した。41年2月に日本大学歯科を卒業して、帰台した。

作品の発表期間は昭和16年から昭和19年（1941～44年、20歳～24歳）の間、僅か4年間程で、その発表の舞台は「文藝臺灣」を主にした。昭和17年（1942年）、川合三良と共に「文藝臺灣賞」を受賞した。

周金波の主な作品は下記のとおりである。

A、『水痛』：周金波の処女作

粗筋は次の通りである。

歯医者のは「島民は教化し得るのだ。それも豫想以上に容易に速かに出来得るのだ」という信念を抱きながら、熱心に皇民錬成運動、迷信陋習の廃除などを提唱した。その彼がある日、ある母娘と出会った。末期水痛にかかった娘を早く大学病院へ連れて行くように彼が母親を説得したにもかかわらず、病院へ行かせず、結局娘が死に至ったのである。娘が死んで間もなく、相変わらず賭博に耽る母親は巡査に捕まってしまう、これらの過程を目撃した彼が台湾の真の現状（落後の程度）に圧倒されて、それに抵抗しようという心境に至った。（1941年3月『文藝臺灣』第2巻第1号に発表）

B、『志願兵』：「皇民文学」の代表作

粗筋は次の通りである。

私は三年ぶりに帰台する義弟の張明貴を迎えるため、波止場へ出掛けた。そこで、八年前の学生時代の思い出が蘇って、嘆いた時、同じく張明貴を迎えにきた（張明貴の旧友の）高進六と出会った。その後、この二人の旧友同士は皇民錬成（如何にして日本人になるか）の方法を激しく議論した。張明貴の文化レベルの向上という意見に対して、高進六は拍手を打つことによって日本人になり得る信念は生まれると主張する。だが、高進六が血書志願したのを知ったとたん、張明貴は自分の無力を全面的に認めた。（1941年9月『文藝臺灣』第2巻第6号に発表）

C、『「ものさし」の誕生』

国語運動教育改正を背景にした『「ものさし」の誕生』は、(台湾人就学の)公学校五年生の主人公呉文雄の一日を中心にして、展開して行く。

呉文雄は戦争ごっこをして遊んだ時、常に、(日本人就学の)小学校の児童を意識したり、羨しがっていた。だが、いざ父親に小学校に編入したらと勧められたら、「公学校への執着と郷愁」、「小学校への憧憬が様々の空想を喚び醒したあと、不安と杞憂と執着と郷愁がその空想を叩きのめしてゆく。」このように、内心に忸怩たるものがあることと懸命に奮戦した心境を描写した。（1942年1月『文藝臺灣』第3巻第4号に発表）

大正8年（1919年）1月に施行された「臺灣教育令」では実は、本島人（台湾人）と内地人（在日日本人）との共学が正式に認められなかった。が、事実上共学制が多少認められたのは、大正9年（1920年）1月8日の「台湾総督府報」である。大正11年「改正臺灣教育令」に至った後、形式的に共学制度が認められた。要するに、「公学校」の生徒が「小学校」に入学することは申請した上、許可を受ければ、可能になるわけである。（『明治以降教育制度発達史 第十一巻』文部省内教育史編纂会編集 昭和17年7月31日発行 749頁、1068頁、1079頁参照。）

D、『ファンの手紙』

改姓名運動を背景にしたこの作品はK先生のファンの「私」がK先生に出した九通の手紙を通して、台湾青年が日本名に名乗るまでの葛藤を語った。

「私」が改姓名に踏み切る理由は、仕事上の挫折と上司から受けた差別待遇のつらい経験を、すべて自分自身が日本人になりきれずにいたからだと考えたからである。もっといい人生を送るためには、改姓名しかないという考えを描いた。(1942年9月『文藝臺灣』第4巻第6号に発表)

E、【気候と信仰と持病】

神道信仰をテーマにしたこの作品には、主人公の蔡大禮は神道への信仰のために、周囲の環境や人々と融和できなくなった。蔡大禮の信仰の底には、伝統的な信仰に対する下心——何か得られるとか、自分の夢をかなえてくれるとか——が見え隠れしている。そこで、蔡大禮は真剣に信仰してきた神道が自分の持病を直してくれない空しさ、その信仰に対する動揺した心の情けなさに苦しんだ末、台湾宗教の信仰象徴の「観音菩薩」に戻った、という経緯を書いた。(1943年1月『台湾時報』に発表)

F、【郷愁】

粗筋は次の通りである。

東京から台湾に帰って来た主人公の「私」は、いつも無意識的に台湾と東京を比べている。「私」の目には、台湾の不条理が写り、台湾のためと思って、いろいろ計画を立てても、周囲の人々に受け入れられず、寧ろある敵意の冷たい目で見られている。「私」は、孤独感をしみじみ感じて、回りに関する無力感に溢れた毎日を送って、不安の境地に落ちている。(1943年4月『文藝臺灣』第5巻第6号に発表)

資料2 川合三良について

生年不詳。父は明治28年に渡台し、川合三良は恐らく大正初年台湾に生まれて、高等学校、大学時代は内地（日本）で過ごしたのであろう。昭和16年に文協会計部長に就任したようである。

作品の発表期間は昭和15年から昭和18年（1940～43年）の間のようで、その発表の舞台は『文藝臺灣』を主にした。昭和17年（1942年）、「文藝臺灣賞」を受賞。

川合三良の主な作品の粗筋は下記のとおりである。

A、【轉校】

八歳の洋一は、父に連れられて、故郷のお婆の所にやって来た。地元の小学校に転校したら、「台湾」から戻って来たという理由で、差別されて、いじめを受けた。このような洋一が台湾を懐しがらう様子を描いた。(1941年5月『文藝臺灣』第2巻第2号に発表)

B、【ある時期】

八年ぶりに、停学処分になされて、妄想の病的境地に落ちた主人公竹田洋一は、台湾の旅を通して、自分の過去をもう一度凝視して、そして、生きて行く力を得た、という。(1941年7月『文藝臺灣』第2巻第4号に発表)

C、【出生】

六章から構成されているこの作品の主人公竹田洋一は、戦場から帰って来たばかりの帰還兵である。マラリヤに悩まされながらも、日常の平和生活に戻った。そして、妻の妊娠、出産を経験した平凡な生活の中に、一人の少年——曾清福と出会って、間もなく、彼は志願兵として、出征した。(1941年9月『文藝臺灣』第2巻第6号に発表)

D、【一つの縮図】

この作品は、台湾の生活経験があった時田栄助と、台湾からやってきた黄清合二人の成長過程を主軸とした少年から、青年にかけての青春記録である。それぞれ違う道を歩んでいた友は、軍人になったために、偶然にも二〇年前の約束——どこかで集まること——を果たした。(1942年5月『文藝臺灣』第4巻第2号に発表)

E、『襤褸』

主人公敏夫と父との確執は、敏夫の巣立ち、結婚、妻の妊娠、出産につれて、和解するに至った。(1942年9月『文藝臺灣』第4巻第6号に発表)

資料3

『日據時期臺灣小説研究』 141～142頁 許俊雅 文史哲出版社 1995年2月 台湾。

代表例として、上述から関係がある部分を訳した。その中で、戦前の台湾文学に対して、こう定義している。「『台湾文学』の内包について言うと、即ち、この50年間（訳注1895～1945年）、台湾本土に生まれた文士によって、中文（文言文、白話文、台湾語文含む）或いは日本文により、書かれた小説がすべて本文の探求対象となる」。さらに、「日據時期に、日本人例えば、西川満、坂口樗子、佐藤春夫、庄司總一、濱田隼雄、尾崎孝子、中村侑などは、少なからず台湾経験を反映した小説を書いたが、彼らは前文の定義——所謂『台湾本土に生まれた文士』——ではなく、その作品は日據時期における台湾『日本文学』に属する一部分なので、本文では述べないことにした」と述べている。

だが、川合三良のような「台湾本土に生まれた文士」はどうして依然として排除されたかが、疑問として残されている。

資料4

(A)「(訳) 占領時代の末期、所謂『皇民文学』というのは、作家が強力なファシズムの力により虐げられた状況の下で、精神面が現実の環境におされた結果、屈従、傾斜せざるを得なくなり、表面的に、日本の植民統治及びその侵略戦争を認めた妥協的な『時局文学』である。それは時代の産物であり、日本帝国が高压統治した、必然の結果であって（以下略）……」

(B)「(訳) 占領時代の末期における皇民文学は、戦時中、滔々たる皇民化運動の浪が巻き起こったとき、立場が確立していない少数の作家を、日本植民当局が脅したり、利で誘ったりすることによって屈従させ、侵略戦争を謳歌した文字を書かせたものである。しかし、こういう屈従した、逼迫した標語的文学と言うのは、其の文学的価値が結局限られていて、（以下略）……」

（『日據時期臺灣新文學運動研究』 (A) 278頁、(B) 286頁 梁明雄 文史哲出版社 1996年2月 台湾。）

資料5

皇民文学の代表作と言われた三作——『奔流』（王昶雄『臺灣文學』第3巻第3号 1943年7月）、『道』（陳火泉『臺灣文藝』第6巻第3号 1943年7月）、『志願兵』（資料1）は戦後になって、その評価が随分違った。例えば、陳の『道』は当時かなりの反論があったにもかかわらず、戦後になって陳自身の証言によって、評論家がかなり好意的な弁明を寄せた。

周に対する、葉石濤の評論を例として挙げてみよう。

(A)「疑う余地もなく真正正銘の皇民化文学である」（訳文援用）。（『もう一つの『皇民文学』・周金波』注3 星名宏修『野草』第49号 1992年2月）

(B)「戦争の暗黒の深まりと共に、皇民化運動の波はますます高まっていった。そうした中で、植民地政府の政策と考えを同じくして、親日路線に走る作家もいた。例えば、周金波の『志願兵』（文藝臺灣 1941）『水窟』（文藝臺灣 1940）などである。」（垂水千恵氏訳）。（『第二章 台湾新文学的開展』『台湾文学史綱』葉石濤 文学界雜誌社 66頁 台湾 1987年2月初版 1991年9月2版）

(C)「……『志願兵』は高進六という台湾青年が高峰進六に改名し、さらに、血書志願で志願兵になった経緯を描写した。日本人の奴隷化政策が一部の無知の青年の間に効果として現れたという現実をこの作品で証明した。周金波は第二回「大東亜文学者大会」に出席したことがあった。周金波の小説で日本の五十年間の植民地統治により、如何に一部分の台湾人の民族意識が摧破させられたかを、

そして奴隸化が成功したという事実を明らかに示した。これも悲惨な歴史の記録になるといえるであろう。」(『四十年代的台湾日文学』『台湾文学的悲情』葉石濤 派色文化出版社 53~54頁 台湾 1990年1月)

(D)「……周金波が書いた『志願兵』は確かに皇民文学的傾向が強かった。だが、この作家は光復以降創作したことがないし、文壇からも外れた。当時あの環境の下で、何であんな作品を書いたか。本当に自分が日本人と同じものだと認めて、さらに迎合したかどうかについては、本人が説明する気がない限り、どんな攻撃をしたとしても、不平且つ無聊のことになる！」(『皇民文学』『台湾文学的悲情』葉石濤 派色文化出版社 125頁 台湾 1990年11月)

これらの評論を見ると、微妙に変化していることが分かる。その変化は皇民文学の再評価の風潮と多少関係があると思われるが、そこでも本人の証言がキーワードとなっているようである。

資料6

昭和16年8月21日付けの『台湾日々新報』に載せた「二つの方法」(『志願兵』の創作期間とほぼ同時期)の中で、周氏はこう堂々と宣言している。

「我々は子供を立派なひとに育てるのに二つの方法を考える。一つはなだめすかして、ときには褒めもする。もう一つはビシビシやつて、ときには叱りつけたりする、兩者とも必要であり、子供の性質如何によつてどちらに重きをおくかが決められる。臺灣はまさに成長せんとする子供である。我々は總がかりでこの臺灣を育てあげなければならない。そこで性急な私は後者を撰んだのである。寛容な人士は大いに臺灣を褒めてやつてくれ。私は私のやり方で、えこひいきなしに容捨なくやつつけた。これが臺灣に對する積極的愛である、と私は自負してゐる。」(原文のまま)

資料7

『轉校』の中で、帰郷した洋一を川合三良はこう描いた。

「洋一の頭に描かれてゐる内地は臺北よりずつと明るく、美しく、夢の様に華かな世界であつた。」

「煤けた天井や汚れた机が、妙に物悲しく洋一の目に映つた。彼の美しい夢は既に半分以上破れかかつてゐた」

資料8

「私が帰台する前の年に、先に帰っていた張明輝先生が『文藝臺灣』の創刊号を、東京の下宿先に送ってくれました。内台人作家がズラリと名を列ねた豪華な印刷に、眼をみはりました。文学への関心、というより、台湾への強い郷愁が湧き上がりました。そこで、帰省の際に見た、重症の少女を顧みない賭博好きの母親を憎む気持ちを、そのまま「水癌」に書きました。(中略)これが、私の文章を書くなれ初めであります。それまでは全く門外漢で、文章を書くことなど一度も考えたことはありませんでした。」(『私の歩んだ道—文学・演劇・映画』[周金波氏講演記録]『野草』第54号 1頁 1994年8月1日。)

資料9

『台湾万葉集 続編』 190頁 孤蓬万里編著 集英社 1995年1月31日発行

討議要旨

鶴崎裕雄氏より、「二世」ということばの意味するところについて、日本の占領時代を知らない人たちととらえてよいかとの質問があり、発表者からは、占領後に生まれ、幼少時より日本文化の洗礼を受け、日本の教育を受けてきた世代を、中国文化の中で育った世代と区別する意味で用いているとの回答がなされた。

また、西原大輔氏より、戦時中の文学を考える場合、歴史的な価値と文学作品としての価値との二つを問題にしなければならないとの指摘がなされ、西原氏は台湾で活躍した日本人が「日本とは違う台湾」を強調することで、台湾人の側に「中国とは違う台湾」という視点が生み出された、その点において、こうした文学は台湾というアイデンティティを形成するうえで歴史的な価値があるのではないかとの意見を提出された。